

＋9 【あめじょ】

これは雨の日。

雨の日に、小川のほとりで、きれいな女のひとが立っているのを見かけました。

声をかけましたが返事はありません。

傘もさしていないので、ぼくは自分の傘を貸してあげようとおもったわけです。

ぼくは濡れてもかまわない汚いかわらけですが、きれいな女の方は、きれいな着物をきていました。

紺なのか紬なのか、いまではもうわかりませんが、青く見えたり、黄色く見えたり桃色に見えたりしていました。

まさか小川に飛び込んだりしないだろうな。

でも飛び込んでも、小川なら足が立つ。

でも横になってしまえば溺れる。

そうおもいながらぼくは近寄っていきました。

すると、雨の雫と同じ速度で、女の方は消えてしまいました。

もったいない気がしました。

将来結婚するなら、ああいう女の方がいいな。

そう瞬間的（しゅんかんてき）にかんじていたのです。

ぼくはそのまま懐爺のところに行きました。

「【あめおんな】をみたぞい」

懐爺は笑いながら、

「それは雨女と書いて【あめじょ】のことでしょう」

「【ゆきおんな】がいるのに、【あめおんな】じゃないのかい」

「はい。【はれおんな】と【あめおんな】はいません。生きている人にはいるかもしれませんがね。おぼけはあくまでも【あめじょ】」

「どうして、〈じょ〉なんじゃ」

「つまり、〈如〉という漢字は、女へんに口ですね。口数のすくない女は【あめじょ】の如くといいましてね」

そして懐爺はまた笑いました。

「ほんまかのう」

「ほんまかどうかは、なにせおばけの話ですから、わたしにもはっきりしたことはいえません」

「いいかげんじゃのう」

「いいかげんでも、おばけの話というのは、なんでもかんでもそういうものなのです」

懐爺はまた笑いました。

「いいかげんは、きれいじゃのう」

けれどもおとなになって、いいかげんなことばかりしてきたぼくは、いいかげんは〈好い加減〉なんだと、よく嘯（うそぶ）いていたものでした。